

寒い。鮫島が目を開けたとき、まず感じたのはそのことだった。全身が顔の表面から手足の指先に至るまで、ひどく冷えきっていた。着ている洋服はじつとりと湿り、吹きつける風の冷たさとあいまつて、さらに体温を奪っている。

ついで襲ってきたのが、吐き気を伴った頭痛だ。割れるほど痛むわけではないが、頭の芯に直接、大きな重たい杭をふりおろされたような鈍痛があった。口と鼻の奥にも、酸っぱいような、奇妙な味がある。

手が枯れ草に触れた。悪臭が鼻にさしこむ。嗅いだことのある臭いだ。大量の排泄物と飼料の入り混じった臭い。

動物園か。

ゆつくりと体をおこした。とたんに今まで感じていた寒気と痛みが現実化し、激しく襲いかかった。

濃い闇の中にいる。ようやくそれを察知した。濃い闇は悪臭を放ち、寒さと痛みはじつとしていられないほどだった。事実、歯の根が合わず、がちがちと音をたてた。

深呼吸をしようとして咳こんだ。咳こむ声がより現実に鮫島をひき戻した。

立ちあがった。足がもつれ、闇の中にのびした手が、固く冷たい網目に触れた。金属音が

響き、鮫島はかろうじてバランスを保った。網目のひとつひとつは一センチ四方もない。指先もだせないほど、目が詰まっている。そして固く、わずかに——一、二センチは——揺らせるが、それ以上はびくともしない。

どこかで同じような音がした。金属が触れあう音だ。反射的にでかけた声をこらえ、鮫島は、耳をすませた。

寒い。足踏みした。裸足であることに気づいた。靴下ははいているが、靴はない。地面は冷んやりとしたコンクリートで、その上に枯れ草のようなものが散らばっている。

手が上着を探った。ライターがあった筈だ。

消えていた。煙草も、財布もない。そして警察手帳もなくなっている。

鮫島は再び息を呑んだ。なぜだ、何が起こったのだ。

冷たい風が吹きつけた。離れたところで、トタン板がこすれる音がした。鮫島は爪先立ちし、手をのびした。指先に何も触れない。

腕時計をみた。なかった。さらにいえば、ベルトもネクタイも消えていた。

ネクタイを結んでいた筈だ。法事にでたのだから。

法事。その言葉が胸に浮かんだこと思い出した。ここは東京ではない。自分は飛行機に乗って、この土地にやってきたのだ。今いるのが、それと同じ土地ならば。

羽田からジェット旅客機で一時間五十分。空港からレンタカーで約一時間。

床を蹴り、ジャンプした。指先がトタン板らしき波状の金属板につきあたり、がらん、という音をたてた。

今度は周囲を指先で探った。右へ一步半、網目にぶつかる。反対方向に三步、四歩目でつきあたる。幅は二メートルと少しだ。

前へ出た。すぐにぶつかった。指先で網目に触れながらその場で向きをかえ、踏みだした。二歩と少し、左右と同じ金属の網目に指先を遮さかられた。

立ち止まった。動物園と最初に感じた自分の勘はまちがっていなかった。

そこは屋外に作られた檻の中だった。四方の壁は細かい網目の金属フェンスで、屋根はトタン板。そして身を切るように冷たい風がときおり吹きつけてくる。

だが動物の鳴き声は聞こえない。動物はいないか、いても鮫島のいる檻からは離れた地点におかれている。鮫島がいる檻は、現在使われていないものだ。

そこに考えが至ると、前後左右のフェンスに、鮫島は両掌を押しあて、激しく押した。

わずかに動いたのは、一面のフェンスだけだった。最初に指先が触れた側だ。あとの三面はびくともしなかった。おそらくその面が扉なのだろう。だが指先すらだせない網目では、とうてい脱出はおぼつかない。

閉じこめられている。

誰が、何のために。

寒さとおかれている事態の異常さに、頭が麻痺していた。

声を出そう。

まだだ。

衝動と、それを抑えようという理性がせめぎあった。

何があつたかを思いだすのだ。誰に会い、何を話し、ここで目覚める直前までどこにいたかを思いだせ。

寒さと戦うために奥歯をぐつとかみしめた。身震いし、両手を握りしめた。闇の中に目をこらし鮫島は記憶をたぐることにした。

空港から市街地まで距離は、約四十キロだった。羽田で飛行機に乗りこんだ時から、レンタカーを借りようと鮫島は決めていた。国産の千八百ccセダンを借り、出発したのが午前十時二十分だった。市街地までは高速道路が通じている。三十分もあれば、到着できるだろう。宮本の七回忌は、正午から始まると聞かされていた。法事のおこなわれる寺は、市北西部の高台にある。そこまで最寄りのインターチェンジからはほぼ一本道の筈だ。

市の東側に広がる湾にそって、南北に発展した都市だった。明治以降、多くの政治家を輩出したことでも知られている。宮本はこの土地で生まれ、高校を卒業するまで育った。そして東京の大学に進学し、国家公務員上級試験に合格して、警察庁を志望したのだ。

宮本と知りあったのは、警察大学校だった。小柄だが、鼻柱の強い正義漢という印象がある。負けん気が強く、誰よりもがんばり屋だった。ひきかえ鮫島は、考えていることをあまり表にださないタイプで、周囲から変わり者と見られ、孤立していた。

鮫島はもともと人づきあいが苦手だったわけではない。変わり者と思われたのは、同期キャリア組の考え方にどこか違和感をもち、彼らとの「討論」に進んで参加しなかったからだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。